

「近代」概念の空間的含意をめぐって

—モダン・ヒストリカル・ジオグラフィの視座と展望—

米家泰作

- I. はじめに
- II. 「近代」概念の空間的含意
 - (1) 時代区分と空間的枠組み
 - (2) 差異・他者・過去の心象地理
- III. ひとすじの心象地理と日本
 - (1) 「上古」の心象地理
 - (2) 「過去の日本」としての朝鮮半島
 - (3) 他者化と自己化の近代
- IV. おわりに

I. はじめに

シンポジウム「近代の歴史地理・再考」に臨むにあたり、本報告は歴史地理学にとって「近代」とは何かという基本的な問いに立ち戻って、近代の歴史地理の再考を試みる。その際、「近代」という本来は時間的な概念に着目し、これを空間的に捉え返すことで、近代の歴史地理の視座と課題を展望したい。

当シンポジウムでは、おおむね近代日本が具体的な議論の的となったため、「近代」という時代区分がどの時期を指すのか、そして区分の根拠は何かという議論は、明確な論点にならなかったように思われる¹⁾。明治維新からアジア・太平洋戦争の終結まで、すなわち1860年代末から1945年までが「近代」であるという共通理解の下で、シンポジウムが進行したといえるだろう。この理解は日本で歴史教育を受けた者にとっては馴染み深いもの

であり、報告者もその意義をただちに否定するわけではない²⁾。しかし本報告では、歴史地理学にとって「近代」とは何か、あるいは歴史地理学は何にモダニティ（近代性）を見いだすのかという問いに接近するために、「近代」という時代区分そのものが空間的な文脈を背負っていることを指摘し、地理学的な概念として時代区分を捉え返すことを試みる。

「近代」を地理学的な概念として捉え返すためには、少なくとも2つのアプローチがあると考えられる。第1のアプローチは、「近代」の指標となる地理的事象を演繹的に規定して、その事象が展開する時代を「近代」として認める方法である。その指標としては、例えば、資本主義の展開、産業化、グローバリゼーション、国民国家・国民経済の形成、都市化といった諸事象が考えられる³⁾。いずれも、急激な空間の編成と統合を引き起こした事象であり、近代に特徴的な地理的事象とみなされてきたものである。ただし、このアプローチに依るのであれば、例えば1860年代末から1945年までを「近代」とする区分に安住するのではなく、むしろ様々な観点から歴史地理学的な「近代」の時期が議論されることが望ましい。その結果として、一般に近世（初期近代）や現代とされている時期を含めて、広義の「近代」を議論の的としてゆくことも十分考えられる。

キーワード：時代区分、心象地理、古代、植民地主義

これに対して、第2のアプローチは、「近代」という時間の感覚が立ち現れる空間や場所に注目して、自らを「近代的」とみなす視線やアイデンティティがどのように形成されたかを問題とする方法である。第1のアプローチのように現在の研究者が「近代」概念を演繹的に規定するのではなく、近代当時の視点から帰納的に探るアプローチであり、歴史認識と場所との関わりを問う立場だといえる⁴⁾。その際、重要な鍵となるのは、「近代」概念それ自体というよりは、むしろ「近代」に対比され、「近代」を浮き彫りにすることになる「前近代」や「古代」に対する理解のあり方であろう。とりわけ、他者や他所を「過去」の存在と見る心象地理は、自らを「近代的」な主体とみなす視線やアイデンティティに強く関わっていた。本報告はこの第2のアプローチから、歴史地理学における「近代」を再考したい。

ここで第2のアプローチとした問題意識は、これまでの歴史地理学において決して希薄であったわけではない。E・W・サイードが提起した2つの概念、オリエンタリズムと心象地理の強い影響を受けて⁵⁾、ヨーロッパの視点からみた「近代」概念と対外的な心象地理との関わりは、近代の歴史地理を構成する重要な問題の一つとして位置づけられている⁶⁾。同時代に共存するオリエン（東洋）を「文明化」されていない「遅れた」世界として理解することは、「文明化」を遂げた「近代的」な世界としてのオクシデント（西洋）を自認することであった。さらに、このような単純な構図をそのまま追認することなく、複雑な社会関係や空間的ネットワークのなかで展開する様相をめぐって、歴史地理学の研究が重ねられている⁷⁾。

一方、近代日本においてもこれに類似した心象地理が展開していたことは、神田孝治の一連の研究が指摘するところである⁸⁾。しかしながら、日本の歴史地理学においては、神

田が扱った台湾や「南方」を除き、近代日本における対外的な心象地理が正面から論じられてきたとはいえない。英語圏の歴史地理学における研究の展開とは対照的なことに、近代日本の歴史地理を考える上で、この問題は未だ検討が十分に進んでいない重要な課題だといえる⁹⁾。

それゆえ本報告では、この問題意識を改めて学史的に詳細にたどることはしないものの、まずは「近代」概念を単なる時間の問題ではなく、空間的な問題として取り扱う必要性を確認する（Ⅱ章）。次いで、当シンポジウムにおいて実質的な焦点となった日本に立ち返って、18世紀から20世紀初頭にかけての心象地理と「近代」との関わりについて、試論を提示する（Ⅲ章）。そのような作業を通じて、「近代の歴史地理」にとって「近代」とは何かという基本的な問いに答えるとともに、近代日本の歴史地理学が取り組むべき課題を、時間的にも空間的にも拡張する可能性を展望したい。

Ⅱ. 「近代」概念の空間的含意

(1) 時代区分と空間的枠組み

古代・中世・近代といった時代区分が優れて空間的な思考の産物であることは、国や地域によって区分の時期が全く異なる所によく表れている。例えば、古代と中世の区切りは、日本では平安時代の末にあたる12世紀とされるのが一般的であるが、西ヨーロッパにおいては西ローマ帝国の滅亡にあたる5世紀に置かれることが多い。およそ700年も異なるこの差異は、時代区分という時間の区切り方が全世界を普遍的に包含するものではなく、それぞれの国や地域という空間の枠内でのみ承認されるに過ぎないことを如実に示している。

時代区分が一国史や地域史の枠組みと不可分のものであるならば、国や地域による時代区分の時期の差異が、発展段階の先後を単純

に表すものではないことに、まず釘を刺しておかなくてはならない。上記の例でいえば、西ヨーロッパが約700年分、日本よりも歴史が「進んでいた」ことを意味しているのではない。互いに共有できないそれぞれの論理によって、時代を区分する作法がそれぞれ承認されていると見るのが適切であろう。その点で、「日本に古代はあったのか」という井上章一の率直な問いかけは、日本の時代区分が一国史の枠組みに強く依存していることを浮き彫りにしている¹⁰⁾。井上の私論には、東アジア全体の視野に立つことで、日本の奈良時代や平安時代を「中世」として捉え直そうとする見方が含まれている。このことは、歴史叙述における空間的枠組みの設定によって、時代区分が簡単に变化しうることを物語っているものであり、T・モリス・スズキの表現を借りるならば、過去に対して「近代の地理観を時代錯誤的に投影した」ことの帰結だといえる¹¹⁾。そこでは、近現代の空間的枠組み——とりわけ国民国家——を単位として、全体として意味のある時間の流れ、例えば何らかの発展段階や「文明化」や「進歩」の歴史といったものを、ひとすじの時間軸の上でたどることができるという前提、あるいは錯覚が成立しているのである。

そもそも「近代」や「modern」という言葉は、本来は「最近」あるいは「近頃」という意味の語彙であって、それこそ古代から用いられてきた¹²⁾。これらの語彙が時代区分の概念へと転化するためには、「近代」（現在）と明確に対比され、「近代」とは何かが決定的に異なった時代としての「古代」の概念化が同時に必要である。ヨーロッパの場合であれば、12世紀以降、宗教哲学や文学の議論のなかで、次第に「古代」と「近代」が対峙的に位置づけられるようになり、ギリシア・ローマ文明を「古典」あるいは「古代」とする歴史観が確立してゆく¹³⁾。日本の場合、仏教的な歴史観をひとまず除外するならば、日

本という空間的枠組みに即して「上古」を探求する国学が展開し、日本的な華夷思想が確立する18世紀が¹⁴⁾、重要な転機とみなされよう。いずれの場合も、まさにそれぞれの空間的枠組みの内に限定する形で、時間軸の原点となる時代を設定するものであった。そして原点としての「古代」が定まりさえすれば、それと対比する形で自らの時代を「近代」と理解し、その中間に「中世」ないし「中古」を置くことによって、全体としてひとすじの「直線的な時間」、とくに近代社会に特有の「無限に上昇する時間¹⁵⁾」の流れを想定することが可能となる。このような意味で、時代区分というものは特定の空間的枠組みを暗黙の前提としており、異なった空間では異なった時間の流れが想定されてきたことを確認しておく。

しかしながら、このことは「近代」概念が帯びている空間的含意の一側面に過ぎない。本報告にとってより重要な問題は、異なった空間の結びつきが生み出す時間の感覚である。とりわけ時間軸の原点となる「古代」が、必ずしも当該の空間的枠組みの内では閉じているわけではないケースである。そもそも、古代という本来は現前しえない過去が人々にとって理解可能なものとなるためには、何らかの形で「古代」とのリアルな遭遇が用意されていなければならない。例えば、古典籍を通じて知り得る古代、つまり文字通り「古典」としての古代がそうであり¹⁶⁾、現実の地理のなかに実体として残存する遺跡や痕跡もその役割を果たすことがある¹⁷⁾。それに対して、オリエンタリズムにおける東洋の心象地理のように、ある空間的枠組みの外にある同時代の他者や他所を「古代」と見なす視線は、文字や遺物を通じて知り得る「古代」ではなく、実体として現前する「古代」を呼び起こすものとなる。言い換えれば、特定の枠組みを超えた空間的な関係のなかから時間の感覚が立ち上がってくるのが、本報

告の次の問題となる。

(2) 差異・他者・過去の心象地理

特定の狭い空間的な枠組みを超えて、広く空間的な関係が取り結ばれることは、まさに近代という時代の地理的な特色として理解されてきた現象である。例えば、英語圏の「近代の歴史地理」の動向を概説した『モダニティの歴史地理』において、編者のB・グレアムとC・ナッシュは、歴史地理学が近代を扱う上での3つの中心的なテーマとして、

①相互に結びついた歴史地理

②多様なモダニティの歴史地理

③現在における過去のポリティクスを挙げている¹⁸⁾。①はローカルにもグローバルにも空間的なネットワークが展開し、場所と場所とが相互に結びつく関係を指している。ただしそれは、ウォーラステインの世界システム論に典型的にみられるような、ヨーロッパを中心とするグローバル化という理解ではなく、既存の様々な地域的なネットワークが互いに結びついていく過程として位置づけられている¹⁹⁾。それ故に、②として、モダニティのあり方は場所によって多様であり、単純にある場所から周辺に伝播するような性質のものではなく、場所と場所の双方向的な関係のなかで形づくられるものとして理解される²⁰⁾。

ただし、双方向的な関係が、必ずしも相互に対等で歪みのない心象地理をもたらすわけではない。ナッシュ自身が概説しているように、むしろ都市からみた農村、あるいは西洋からみた東洋に対しては、「人種」やジェンダー、階級といった視点と結びつくことによって、「文明化」の遅れや、自然に埋没した「原始的」なあり方が、ことさらに強調されることになる²¹⁾。このような見方は、逆に都市や西洋の側を自律的かつ合理的であり、自然を支配する立場にある「近代的主体」として構築することと連動している。その際、

都市と農村、および西洋と東洋の間の差異は、質的に全く異なるものとして位置づけられるというよりは、同じ尺度における達成や進歩の度合いが測られ、それぞれ前者から見て後者が「遅れている」とされた。いうまでもなく、サイドの示したオリエンタリズムとは、このうち西洋からみた東洋の心象地理を問題にしたものであった。

近代という時代が、ローカルにもグローバルにも空間的なネットワークが展開する時代であったとすれば、ある場所を「遅れた」場所とする認識が生まれる契機も、無数に生まれたと想定される。すなわち「地理学の帝国」——様々な近代の地理的知が地球上を覆い尽くし、秩序づける営み——のなかで、モダニティの到来を待つ「遅れた」場所が至るところで「発見」されたと考えられる²²⁾。上記③のテーマ「現在における過去のポリティクス」も、このことから無関係ではない。ナッシュが博物館展示における先住民の「原始主義」的あるいは進化論的な位置づけを例として説明したように²³⁾、現在もなお残る「遅れた」他者という表象は、近代から引き継がれたものと考えなくてはならないからである。近代の歴史地理を形づくる空間的ネットワークが、「近代」という尺度で場所を計測する作法を生み出したとすれば、それは前節で触れた特定の空間的枠組みの内、「過去」に向かう時間意識とは異なり、共時的な他者や他所が帯びている差異に「過去」を見いだそうとするものであったといえる。

こういった地理的な差異に時代の先後を重ねる見立ては、空間の区分と時間の区分を結びつけるものであった。とりわけ、報告者もかつて整理したように、近代における農山村や東洋といった他所への旅行は、しばしば「過去」への旅として表象された²⁴⁾。例えば、19世紀半ばのエジプトを訪問した2人のヨーロッパ人——ナイチンゲールとフローベール——を採り上げたD・グレゴリーは、現在と

してのヨーロッパ（西洋）と過去としてのエジプト（東洋）が時空間の両極として対置されたと論じる²⁵⁾。若き日のナイチンゲールにとって同時代のエジプトにはほとんど価値がなく、人種差別的な嫌悪を含む否定的な評価ばかりを与えている。その一方で、古代文明の遺跡には強い共感を示しており、彼女にとってエジプトとは「古代のエジプト」以外の何物でもなかった。対して、小説家フローベールはエジプト滞在中、ヨーロッパ的な性の価値観においては没倫理的な事柄——性的な物語や売買春——に多大の関心を示した。彼にとってエジプトとは性倫理の未発達な「遅れた」場所であり、だからこそ滞在の価値があったといえる。

このような例はヨーロッパのオリエンタリズムのみ見られたわけではない。E・J・テンによれば、明末から清朝の時代、中国本土から台湾を訪れた旅行者は、野蛮の意を込めて台湾の先住民を「蕃」と呼び、すでに中国本土では廃れた古い生活や文化がそこに見られるとの心象地理を形成した²⁶⁾。そもそも伝統的な華夷秩序の思想において「夷狄」は中国文明の教化の対象と位置づけられてはいたが、近世の台湾に対しては歴史的なアナロジーを用いて文化的な他者を表現することが常套手段となったという。すなわち、先住民らは同時代に生きる異文化の担い手ではなく、文明化が遅れ、古い時代に取り残された人々だとされ、だからこそ中国文明への同化が今後の道筋として当然視されることとなった。共時的な他者から同時代性を奪い取り、はるかに古い文化が現前していたかのような心象地理は、時代区分としての「近代」と明確に結びついてはいないものの、現在（中国本土）と過去（台湾）を時空間の両極に置くものであった。

以上、雑駁な概観にとどまるが、「近代」概念に込められた空間的な含意としては、前節で触れたような特定の空間的枠組みの内に

閉じた時間意識に対して、逆にその周辺や外側に対する空間的ネットワークの広がりの中から生じた心象地理という、対称的な2つの様相を指摘することができる。両者は一見、空間的な方向性が異なるようではあるが、空間や場所によって別の時間が流れていると理解する点が、共通の前提となっていることに気づく。それゆえ、これらは全く別個のものというよりは、むしろ複雑に相関していると考えなければならないが、報告者にはその相関を丁寧ときほぐす用意ができていない。ただし、次章につながる課題として触れておかなければならないことは、サイドがはっきりと述べているように、他者の心象地理とは決して近代の産物ではなく、それこそ原始社会においても古代ギリシャにも存在したであろう「普遍的習慣」だと考えられることである²⁷⁾。中国的な華夷秩序の思想も元来はその一種と見るべきであろうし、南・東南アジアにみられた「宇宙国家」の思想²⁸⁾にも類似性を見て取ることができよう。従って、他者や他所の心象地理を形成することが、ただちに「近代」という時間区分やアイデンティティに繋がるわけではない。心象地理が時代区分の感覚に結びつくという事態が、まさに近代的な事象であることを改めて問わなければならないだろう。

そこで次章では、本シンポジウムの中心となった日本に事例を求めて、差異・他者・過去の心象地理が形成される諸相を検討しよう。

Ⅲ. ひとすじの心象地理と日本

(1) 「上古」の心象地理

日本においても、他者や他所の心象地理を形成することが、ただちに時代区分の感覚、とりわけ「近代」という概念に繋がるわけではなかったことは、幾つかの例を通じて簡単に示すことができる。例えば、古代日本の都市—農村関係に「意味の空間構造」を読み取

ろうとした千田稔は、ミヤコ（都）の外側、具体的には畿外がヒナ（夷）と呼ばれ、またさらにその東の外側がアツマとされたことを指し示している²⁹⁾。さらに本来は農家・農村を意味するにすぎなかった「キナカ」が、平安時代には「みやび」の対極として蔑視されるようになるという。これらの語彙の変遷からは、都城から辺境に対する視線のうちに次第に否定的な意味が含まれていったことが読み取れるが、そのことが時代区分の問題に直結したような形跡は窺えない。

また、日本の外周に関する心象地理の例として、18世紀初頭までの行基式日本図やその系譜を引く日本図に描かれた想像上の異界、「雁道」や「羅刹国」に触れてもよいだろう。これらは琉球や蝦夷島（北海道）とともに、本州・九州・四国をとりまく外的な異域を構成していた³⁰⁾。ただしこれらの異界は、雁と関わる「常世」の観念や仏教説話との関連が指摘されているように、ある種の宗教的な意味づけを与えられており、それらが「過去」の世界として位置づけられていたとは考えがたい。ただし、実在する異域である蝦夷島に関しては、18世紀以降、日本側による植民地的な支配の強化とともに、注意すべき変化が現れることになる。

例えば、鉱山調査を意図して蝦夷地を訪れた坂倉源次郎の『北海随筆』（1739年頃）には、アイヌを「実に夷狄にて、獣にひとしき形」と述べながらも、「上古の民」とする表現がみられる。

国に五穀生ぜずといへども、山海の利沢余国に倍し、土民質朴にして利倍を事とせず。誠に上古の民の風有。治平百年の後には奢侈増長して士大夫窮し、諸民勞にたへざるは古今のならひなれども、国の開くる事おそき故にや風俗敦厚にして此衰弊のきざしなし³¹⁾。

著者の源次郎は、別の箇所では「山に住む蝦夷は稗、粟等作り³²⁾」としてアイヌの畑作に触れているにもかかわらず、ここでは「五穀生ぜず」と断定的に述べ、「山海の利沢」に支えられた狩猟採集こそがアイヌの生業の中心だと見ようとしている。モーリス・スズキが議論しているように、アイヌの畑作は日本側の支配と交易によって抑制される傾向にあり、狩猟採集のみがあたかも本来的な生業とするのは恣意的な見方であるばかりでなく、アイヌを「過去の化石化した残存物」のように描く18世紀以降のアイヌ像の表れであった³³⁾。そのことは、源次郎が農業の導入を提言する箇所からも読み取ることができる。「五穀生ずる時に至りては国は次第に弘まり、蝦夷もおのづから習ひおぼへて穀食と成る時は、則本邦の人と化すべし³⁴⁾」。アイヌは将来、和人（日本人）となりうる可能性があるとされが、それは和人から見れば、すでに和人が過去に通りに過ぎてきた状態に留まっているということにほかならなかった。

このような蝦夷島に対する理解が、日本の対外的な周辺に対する心象地理の例であるとすれば、内陸における周辺として対置されるのが山村のそれである。報告者がかつて述べたように、18世紀後半から19世紀にかけての山村への紀行文には、桃源郷的な憧憬と蔑視が込められた例が散見される³⁵⁾。そのなかでも、「上古の民」という語彙を用いた例として、水戸藩の郡奉行・岡野蓬原が領内の山村への訪問を記した『安寺持方の記』（1805年）を挙げておく。

其人淳朴にして言語文なく、往々不解事あり。実に上古の民ともいふつべし。藤布を織て衣とし、野草をとりて食とす。（中略）かゝる幽僻の地なればこそ、淳朴にして上古の風をも存し、文字なき事をも更に不自由に思はず、実に結繩の遺風ともいふべし³⁶⁾。

蓬原は、安寺・持方の村人が文盲のため「めくら帳」と呼ばれる記号表現を用いていることを「結縄の遺風」だとも表現している。興味深いことに、先に触れた『北海随筆』にも文字のないアイヌの記憶術として「結縄」が用いられていることが記されているが³⁷⁾、ここではこの言葉が無文字社会を象徴する語彙として呼び起こされたものと考えられる。しかし実際にこの山村の人々は採集活動のみを生業としていたわけでもなく、文盲であったわけではない。ことさらにその側面が強調された背景には、江戸時代後期の都市文化を身に付けた著者・蓬原の優越感と好奇心があったとみなくてはならない³⁸⁾。

「上古」という語彙でなくとも、「神代」という類似した言葉を用いた例が、鈴木牧之『秋山記行』（1831年）に見られる。

此秋山こそ神代の長寿の如く。是天賦を自然に守り来たり、此土地相応の枋の実・楡の実・粟・稗杯を、都鄙の飲食も同じく賞翫し。是則天より給る所の土地の産物にして、自仙術を学ぶがごとく、色慾・飲酒も恣にせず³⁹⁾。

ここでいう「神代」とは記紀における神武天皇以前の時代と理解され、著者牧之は日本という一國史のなかで「上古」よりもさらに古い時代を念頭においていることになる。その際、上述の『安寺持方の記』と同様、土地の自然への依拠（堅果食や焼畑耕作）に質朴さを見だし、それを古い時代の特色と見ていくことになる。それは裏返せば、都市的な文化を知る牧之にとって、自らが生きる世界が現在であり、隔絶した山村に古代的な生活を「発見」することが『秋山記行』執筆の重要な動機であった。上記の引用箇所では山村生活が称賛されているように見えるが、別に戯作版『秋山記行』を用意し、あたかも「愚か村」のように秋山郷を描いた牧之にとって、

山村という現前する「神代」は、称賛と同時に蔑視の対象でもあるという両義的な位置づけにあったことに、留意しておく必要がある⁴⁰⁾。

以上のように、他者や他所の心象地理と時代区分との結びつきをたどる時、18世紀以降、同時代の他者を「上古の民」とする例がみられることに本報告は注目する。そこには北方・蝦夷島に対する対外的なもの、奥地山村に対する国内の周辺のものと、少なくとも2つの方向性があり、それぞれの用例の出現時期も決して一致しているわけではない。しかしながら、本来は人の手の届かない存在である過去が、具体的な地域や人々として現前しているという見方は共通している。そして、自然への依拠が大きい自給的な経済が意図的に強調され、それが「上古」や「神代」の指標のように位置づけられている所も、奇妙なまでに一致している。ここで見逃してはならないのは、「上古」や「神代」が日本とは全く異なる文化における古代を意味しているのではなく、紀行文の著者らが自らの文化とする日本の過去が暗に関連していることであろう。

その背景として、「上古」や「神代」といった語彙の使用を後押しした国学的な華夷思想との関連を推測しておかなければならない。もちろん、上に触れた紀行文の著者たちが国学に精通していたというわけではない。しかし、18世紀の多くの知識人に学派を超えて影響力をもったとされる日本型華夷思想は、17世紀に成立した清王朝を「夷狄」と見ることで、中国ではなく日本の内に文化的優位性を見いだそうとするものであった⁴¹⁾。その根拠として盛んに参照されたのが、記紀や万葉集から抽出される古代の日本のあり方である。「上古」や「神代」は、日本という空間的枠組みにおいて時間軸の原点を指し示す言葉として機能するようになっていたと考えなくてはならない。その点で、上述の紀行文の著者

たちは、自然条件に大きく依拠した暮らしを続けるアイヌや山村の醇朴さを、観念上の古代日本と繋げてしまうことが可能な教養を身に付けていたことは間違いない。

江戸時代の日本とアイヌの関係を検討したモーリス・スズキは、日本側がアイヌを「わたしたちでない」ものとして差異化すると同時に、「過去のわたしたち」として再定義することで、両義的に扱いつつ同化政策を押し進めたと見ている⁴²⁾。この見方を敷衍すれば、アイヌや山村は、一方では差異を強調され、他者化されながらも、その一方でむしろ日本自身の「過去」の姿として処理されていったことになる。であるならば、ここにみられる差異・他者・過去の心象地理とは、他者化でありながらも同時に、矛盾する表現であるが、「自己化」を図るものであったように思われる。それはもちろん自己との完全な同一視ではない。日本がたどってきたひとすじの時間軸のなかに他者を吸収する営為であり、同じ時間軸の上にもありながらも「上古」と江戸時代は隔たった位置に置かれることになる。この点をさらに検討するために、続いて近代日本にとって最も重要な他所の一つ、朝鮮半島から事例を拾ってみよう。

(2) 「過去の日本」としての朝鮮半島

1910年の併合によって植民地とした朝鮮半島に対する日本側の理解が、併合の前から、また併合後もいっそう、否定的な評価を帯びていたことは、繰り返し指摘されてきたことである。例えば、近代日本の東アジアに対する心象地理を検討した姜尚中の議論を見よう⁴³⁾。福澤諭吉の啓蒙的地誌『掌中万国一覽』や『世界国尽』（ともに1869年）に着目した姜は、ヨーロッパ的なオリエンタリズムを受容した福澤が、「渾沌」・「蛮野」・「未開」・「開化文明」という4つの範疇に世界を分類するなかで、中国や朝鮮半島を「未開」以前の段階に位置づけ、「固陋なる隣国」と

して表現したと述べる。姜によれば、それは「隠された〈自己〉としてのアジアから自らを疎外」しようとする営みであり、それを通じて「近代的な主権の国民国家」として日本のアイデンティティを見いだそうとする試みであったとされる⁴⁴⁾。

このことは、中国や朝鮮半島を停滞した他者として、そして日本を「近代化」しつつある国として位置づけることであり、その心象地理のなかに明らかに時間の先後関係が示唆されている。ただし、福澤にとってその時間軸とは、ヨーロッパからの輸入品であり、欧米的な「開化文明」に至る文明化の段階として普遍的に表現されるものであって、日本が時間軸の基準を作り出しているわけではなかった。しかし、明治以降の日本のたどった体験が未だ為されていないことをもって、東アジアを「停滞」した他者として扱う見方は次第に散見されるようになる。それは開国や通商、政治体制といった事柄だけでなく、森林植生のような環境史的な問題にまで及んでいたことに、ここでは触れておこう。次の文章は、日露戦争後、第二次日韓協約によって保護国化されたことを受けて、朝鮮半島への植民者を読者として発刊されたガイドブック（1906年）の一節である。

朝鮮の山といふ山は殆ど禿山であるから、朝鮮に山無しと言ふても差聞へなからう（中略）。植林など更に考るところか我一がちに互に競ふて伐り取りて顧みなかつたものであるから、それで遂に今日のやうな哀れな有様を呈するに至る（中略）。併し此れは朝鮮ばかり笑はれた義理では無い、日本も近古非常に無茶伐りに山を伐り林をたやすことが盛であつて、一時は到る所禿山が沢山あつたのを、幸ひに近頃気がついて殖林といふことが広まつて来たのである（中略）。悲しいことに朝鮮人にはマダ其気がつかないから斯様に山々が皆禿げて居る

のであろう⁴⁵⁾。

報告者がかつて論じたように、薄い植生を「禿山」と位置づけることは、「自らを統治する能力の欠落」という否定的なレッテルと繋がるもので、それ自体が植民地化を正当化する論理となっていた⁴⁶⁾。ここで注目されるのは、「禿山」形成から森林植生の復活へという日本の体験が近代化のモデルとされ、朝鮮半島においても同じ過程を追体験することが唯一の正解とされていることである⁴⁷⁾。その際、あたかも植林が文明化の指標の一つのように扱われ、それを知らないことが憐憫の対象とさえなっていた。

同じ年に朝鮮半島の農村を視察した新渡戸稲造の文章「枯死国朝鮮」もまた、文明化の段階に朝鮮半島を位置づけた一例として読むことができる。

其生活やアルカヂヤ風に簡樸なり。予は千年の古へ、神代の昔に還りて生活するが如きの感をなす。打見る、多くの顔は神の姿かと誤たるゝばかりに、恬淡、莊嚴、端正なり。されど毫も表相無し。此国民の相貌と云ひ、生活の状態と云ひ、頗る温和、樸野且つ原始的にして、(中略) 彼等は有史前紀に属するものなり⁴⁸⁾。

この言説は、中根隆行が指摘する通り、文明化の段階のなかで「古代的な文明の原風景として朝鮮半島を表象したものであり⁴⁹⁾、ギリシャ神話の理想郷「アルカディア」や「有史前紀」という表現は、文明化の時間軸における古代が半島に現前しているかのような印象を与える。しかしその一方、「神代の昔」という表現には、日本の歴史に引きつけようとする意図も感じられる。これに関して中根が、「昔日の日本のイメージを朝鮮に重ねた見方の原型」だと示唆していることが⁵⁰⁾、本報告においては重要な論点となる。

朝鮮半島を「過去の日本」であるかのように捉える理解は、併合後に書かれた紀行文や随筆に散見される。例として、戦後に名古屋市長を務めた小林橘川が、新聞記者であった時期に記した文章(1924年)を挙げてみよう。

朝鮮人の生活・習慣・思想・文化の中に、日本人のそれらがそのまま原始的状態をもつて遺されてゐるのを私は見た。吾国の古い歴史の生活が、朝鮮ではいまも何等の変化なしに保存されてゐる姿を見た。(中略) 百人一首の中にある持統天皇の歌の情景がそのまま今日、朝鮮のいたるところの山野に見ることが出来る。吾々日本人の祖先も、その昔は今の朝鮮人とおなじく、白妙の衣を着てゐたものであろう。(中略) 私は古い日本のすがたを、朝鮮へ来て発見したような気がする⁵¹⁾。

ここで主張されていることは、白衣という単純な日本と朝鮮半島との文化的な類似の指摘ではない。また、いわゆる「日鮮同祖論」的な系譜上の同根関係の指摘とも似ているようで実は異なる。これは、同時代の朝鮮半島に、「原始的状態」の日本、あるいは飛鳥時代の日本の有り様が、そのまま保存されているかのような理解であって、朝鮮半島に日本とは異なる歴史の発展があったことは見事に捨象されている。ここには、朝鮮半島を異質な他所として突き放し、日本をそこから「疎外」しようとする視線は見ることができないわけであり、逆に日本人自身との同質性だけが強調されている。ただしそれは、あくまで共時性を奪い取られた「過去の日本」であった。著者・橘川にとっては、日本は「原始的」な状態を抜け出し、すでに「古い歴史の生活」を失った時代にあることが、当然の前提となっている。その意味で、前節で観察したような、日本がたどってきたひとすじの時間軸のなかに他所を吸収し、「自己化」する

営為が、ここにも見られるわけである。ただし前節の江戸時代の例と異なるのは、文明化を遂げ、近代化を果たしたという明治の体験が前提となることである。つまり朝鮮半島の心象地理は、「過去の日本」と「近代化した日本」とを明瞭に対比させる役割を担うことになる⁵²⁾。

(3) 他者化と自己化の近代

自己がたどってきたひとすじの時間軸のなかに他所を吸収し、「自己化」する営為の意味について、植民地時代の朝鮮半島に即してさらに検討を深めよう。やっかいなことに、朝鮮半島の場合、日本周辺のほかの他所とは異なり、古代における交流史の史実が上述のような心象地理の形成に拍車をかけたことを考慮しなくてはならないからである。

例えば、植民地時代の扶余（忠清南道扶餘郡）における史蹟整備とツーリズムのあり方は、古代日本と交流を取り結んでいた百済の旧都という位置づけのみに規定され、古代日本文化の淵源ないし故郷であるかのような物言いが投影されるようになる⁵³⁾。1915年に忠清南道長官に着任すると同時に扶余における史蹟整備を進めた小原新三は、百済を「我に帰服すること最も厚く其関係最も親密なりし国」と捉え、「此の母国の其れに似たる山河に対し、油然として一種の情緒湧くことを禁じ得ざるは固より其の所なり」として、扶余の風景を日本のそれになぞらえた⁵⁴⁾。百済からの仏教伝来（538年）や百済の復興を意図した白村江の戦い（663年）という史実を念頭に置く日本人にとっては、扶余を訪問することとは、過去の日本と政治的・文化的に深く結びついた古代王国を、その故地で懐古することにほかならなかった。そこでは、朝鮮半島における古代王国以後の独自の歴史に対する関心は乏しく、古代にのみ焦点があてられることになる。

その際、単に「過去の日本」を想起するだ

けでなく、古代日本の影響力を高く見積もろうとする見方が次第に強まったことに注意が必要である。例えば、扶余には扶余陥落を記念する唐の碑銘が刻まれた石塔（平済塔）が遺されているが、これを前にした考古学者・濱田耕作は次のように想起した。

私はこの日本が天智天皇の朝に半島で失敗した記念碑が、扶余館という日本旅館の側に昔ながらに残っていて、朝鮮総督府の立て札が立っているのをほほえまずにいられなかった。しかしてこの唐の僧懷素の碑銘を抹消して日鮮併合の銘文を刻するだけはしなかった日本人を別に不思議と思わなかった⁵⁵⁾。

ここでは、はるか古代の白村江の敗戦と近代の日韓併合とが対比され、後者（近代）によって前者（古代）の「失敗」が打ち消され、あたかも失地回復を遂げたような余裕に満ちた自信を読み取ることができる。総督府の史蹟保存政策の進展を示す「立て札」や、扶余訪問者のための日本式旅館の存在は、濱田にとって再び朝鮮半島が日本の支配下に入ったことを象徴する光景であり、彼の脳裏には唐の碑銘を抹消して日韓併合の碑銘に置き換えるという空想さえ浮かんだ。濱田のような日本人訪問者にとって、朝鮮半島は、全く新しく獲得した植民地というよりは、かつて日本の強い影響下にあった地域として位置づけられており、全く異質な他所として対象化できるものではなかったといえる。

このような見方は、1930年代に入り、「内鮮一体」が植民地支配のスローガンになると、それがあたかも古代から実現していたかのような空想的な言説となって展開することになる。

当時扶余の都には日本人も二三千人は住んでゐたらしい。歴史の語る所によれば日本

の將軍で妻子を携へて此の地に住し、又或は此の地の女を妻として家をつくり子を産み或は又此の地の人にして日本の女を妻とし子を儲け、所謂日済一体の実をあげてゐたのである⁵⁶⁾。

これは海州高等普通学校の校長・坂田政次郎による扶余紀行の一節であるが、古代の日本人居住地——あるいは文字通り植民地——として扶余を想像していたことが、よく表れている。ここに至って扶余は、単に「過去の日本」を想起させるだけでなく、扶余自身が「過去の日本」であったような含みさえ与えられたことになる。

以上のような扶余に投げかけられた心象地理もまた、日本がたどってきたひとすじの時間軸のなかに他所を吸収し、「自己化」する営為の表れだといえる。しかもそれは、単に自己のたどってきた「過去」の時間軸に他者を当て嵌めるというだけではない。日本という空間的枠組みを恣意的に肥大化させ、そのなかに他所を取り込むことで、「古代」と「近代」とを対比する構図を持っていたことになる。このように他所を自らの時間軸のなかに回収することは、単に異質な差異を際立たせる形で他所を分離し、排除し、他者化することとは全く異なり、他所そのものを空間的に包摂することであったと言わなくてはならない。

サイドは心象地理を定義するに際して、「我々の土地—野蛮人の土地」という恣意的な区分だと説明しているが⁵⁷⁾、それは時代を問わず普遍的に生成される心象地理の原型というべきだろう。植民地時代の朝鮮半島に与えられた心象地理は、そのような原型に適合するものではなく、むしろサイド自身がエジプトを例として説明したことに類似しているように思われる。すなわち、ナポレオンの企画によって18世紀初頭に編纂された『エジプト誌』とは、サイドによれば、

固有の一貫性とアイデンティティーと意味とを備えた歴史としてのエジプト史、東洋史をその座から押しつけてしまう。そのかわり、『エジプト誌』に記された歴史が、実はヨーロッパ史の婉曲表現としての世界史と直接無媒介に一体化することによって、エジプト史、東洋史にとってかわるのである⁵⁸⁾。

『エジプト誌』編纂に際しての地理学的・考古学的調査は、フランスによるエジプトの「知的征服」の端緒となった⁵⁹⁾、そこで生み出されたエジプト史とは、エジプト固有の歴史ではなく、ヨーロッパの「母胎」として一体化させられたものであり、「オリエントをヨーロッパに接近させ、しかる後それをまるごと吸収しようとする⁶⁰⁾」営みであったという。それは、他者を異物のように排除するための「知的征服」ではなく、現実の帝国主義的な拡張のなかに他所の空間と時間を組み込むための作業であり、同時代のエジプトに対する植民地化の過程に随伴するものであった。心象地理が時代区分の感覚に結びつく最も重要な契機がここにあるといえる。

ただし、植民地の時間と空間を宗主国のそれに組み込むことは、両者が全く同質的な空間と時間とを共有することを意味してはいない。『エジプト誌』編纂に際して、同時代の現地人は、古代文明の栄光とは対照的に、停滞のなかで「自らを表象する能力」を欠落した人々として描かれた⁶¹⁾。また19世紀のエジプトを訪れたナイチンゲールは、古代エジプト人を「自分たちと同じように感じたり考えたりする人」と想像する一方、同時代のアラブ人を「猿と人との間の人種」だと記した⁶²⁾。植民地やフロンティア、周辺地域における他者や他所は、「過去のわたしたち」として自己化されるものの、同時代の他者そのものは「現在のわたしたち」の一員ではなく、依然として他者化の対象であり続けるのである。

このような両義的な関係のなかで時代の感覚が生成し、体験されていく事態は、歴史を通じて普遍的に存在していたというよりは、すぐれて近代に特徴的な地理的事象のように思われる。本報告のいう「近代」概念の空間的含意とはまさにこの点にあり、近代とは地理的差異が時代の感覚に結びついた時代であるといえよう。

IV. おわりに

「近代」概念の空間的含意ということタイトルに掲げた本報告のねらいは、歴史地理学にとって「近代」とは何かという基本的な問いかけを呼び覚ますことにあった。ただし、ここまでたどってきたように、本報告は「近代」的な地理的事象として何が論じられてきたかを学史的に検証するものではない。他者・差異・過去そして心象地理をキーワードとして、「近代」という時代の感覚そのものが、空間的な事象のなかから生成することを指摘し、その意味で地理学的な概念として「近代」を捉え返そうとするものであった。

もっとも、そのような指摘自体は決して目新しいものではない。行論中にたびたび依拠したように、本報告は大きくはサイドのオリエンタリズムの議論を出るものではなく、また報告者も訳業に関わった『モダニティの歴史地理』、およびモーリス・スズキの議論に啓発されたところも小さくない。それゆえ本報告は、掲げた目的に対してあまりに基礎的な視座と展望を荒っぽく概観したに過ぎないものである。とはいえ、本報告で扱った問題は、近代日本の歴史地理をめぐる従来の研究蓄積のなかで、最も軽視されてきた問題の一つであり、その点に読者の注意を引くことができれば最低限の目的は達せられたことになる。

改めて本報告で概観した視座と展望を要約しておこう。「近代」を含め、時代区分という考え方は一見、時間の概念であり、歴史学

の領分であるように見なされがちであるが、根本的には空間的な思考の所産だといってよい。そのことは、時代区分というものが世界全体で共有されるものでなく、一国史や地域史の枠組みのなかで成立するところに、まずは明らかである。所与の前提として設定された特定の空間的枠組みがあって初めて、ひとすじの時間軸を措定することができるからである。その時間軸の原点として「古代」や「上古」が置かれることで、時間軸の終点である現在が「近代」として意識され、その中間に「中世」や「中古」が区分されることになる。その際、「古代」や「上古」は過去のものである以上、本来は共時的な存在として現前することはありえないが、近代の相互に結びついた歴史地理のなかでは「遅れた」他者や他所の心象地理という形で立ち現れる。かくして地理的な差異に時代の先後が重ねられることで、空間の区分と時間の区分が結びつけられてゆく。

ただし、他者や他所の心象地理自体は、それこそ古代より連綿と形成されてきたものであり、それが時代区分の感覚と結びつく所に近代的なあり方を見いだされる。日本の場合、18世紀以降の北海道や山村に対して散見される「上古の民」という物言いに、その萌芽が認められ、その背景に古代日本に時間軸の原点を措定する学術的な視点との関わりを考えることもできよう。帝国主義的な植民地形成があらさまに展開した19世紀末以降には、「遅れた」他所として植民地を位置づけ、「近代化」を遂げた自己として日本を対比する構図が明瞭となる。とりわけ朝鮮半島は、同時代の存在としてではなく、古代の停滞を維持しているかのように描かれた。そのために逆説的ながら、異質な他者として植民地を排除するのではなく、逆に「過去の日本」として包摂することが起こる。それは、自己がたどってきたひとすじの時間軸のなかに他所を吸収し、「自己化」する営為であり、必

然的に時代区分の感覚が本国と植民地との間に投影されることになる。ただしその「自己化」とは、あくまで「過去のわたしたち」としてのものであり、同時代の植民地は現実には依然として他者化されるという両義的な関係にあった。

以上のような他者・差異・過去の心象地理は、あらゆる心象地理に本質的に伴うものというよりは、やはり帝国主義の展開や国民国家の形成と深い関わりを持つという点で、極めて近代的な現象であったということが出来る。その意味で、本報告が冒頭に挙げた「近代」概念をめぐる2つのアプローチのうち、第1とした演繹的なアプローチに関して、この「他者・差異・過去の心象地理」が近代の地理的指標の一つとして付け加えられるべきだろう。とはいえ、「近代」という時代区分の感覚が生じる地理的な契機は、本報告が触れたもので全てではない。近代日本の植民地においても、朝鮮半島に対するような心象地理と全く同じものが他にも与えられたわけではなく、過去の交流史に規定される部分も大きい⁶³⁾。また対外的な心象地理とは別に、ほとんど触れなかった問題として、変化の激しい近代都市のように、ほとんど同じ場所であっても人々の記憶に新旧の時間が刻み込まれるならば、そこからモダニティの感覚が生み出されるだろう⁶⁴⁾。議論が行き届いていない問題や、実証的に検証されるべき問題は多く残されているが、今後の研究の展開に期待したい。

(京都大学)

〔注〕

- 1) 「近代の歴史地理・再考」をテーマとする前年度の共同課題報告の多くも、「近代特有の空間編成の原理」を問題意識とした本報告を除けば、「近代」という概念や時代区分は必ずしも焦点にはなりえなかったように思われる。木本浩一「土地利用からみた都市「近代化」—変化と媒介—」歴史地理学53-1, 2011, 55-70頁。
- 2) 本稿では、概念や観念としての「近代」には鉤括弧を付し、一般に認められている時代区分に従う場合には、鉤括弧なしで近代と表記する。なお報告者自身、日本の景観の「近代化」を概観するにあたり、一般的な時期区分に従って明治維新以後を記述の対象としたことがある。Komeie, T., "Modernization of the countryside" in Kinda, A. ed., *A Landscape History of Japan*, Kyoto University Press, 2010, pp.163-185.
- 3) 例えば、当シンポジウムの河野敬一報告「近代歴史地理研究の動向と課題」を参照。
- 4) 歴史認識(時間意識)と場所(空間)との関わりとりあげた研究動向の紹介として、拙稿「歴史と場所—過去認識の歴史地理学—」史林88-1, 2005, 126-158頁, がある。
- 5) E・W・サイード(今沢紀子訳)『オリエンタリズム』平凡社, 1993。
- 6) 例えば、①D・グレゴリー(潟山健一・大城直樹訳)「心象地理」空間・社会・地理思想3, 1998, 169-208頁。②C・ナッシュ(山村亜希訳)「モダニティの歴史地理」(B・グレアム, C・ナッシュ編『モダニティの歴史地理』古今書院, 2005) 15-48頁。③Clayton, D., "Imperial geographies", in Duncun, J. S., Johnson, N. C. & Schein, R. H. (eds) *A Companion to Cultural Geography*, 2004, Blackwell, pp.449-468.
- 7) 例えば, Duncun, J. and Gregory, D. eds., *Writes of Passage: Reading Travel Writing*, Routledge, 1999. Lester, A., *Imperial Networks: Creating Identities in Nineteenth-Century South Africa and Britain*, 2001, Routledge. Yeoh, B. S. A., *Contesting Space in Colonial Singapore: Power Relations in the Urban Built Environment*, 2003, Singapore University Press. Driver, F. and Martins, L. eds., *Tropical Visions in an Age of Empire*, 2005, University of Chicago Press.
- 8) 神田孝治「日本統治期の台湾における観光と心象地理」東アジア研究36, 2003, 115-135頁。同「戦前期における沖縄観光と心象

- 地理」都市文化研究4, 2004, 11-27頁。同「日本統治期台湾における国立公園の風景地選定と心象地理」歴史地理学53-3, 2011, 1-26頁。
- 9) 日本の植民地地理学の研究も対外的な心象地理を支える営みの一つであったといえるが、その系譜が回顧されたのも最近のことである。三木理史「日本における植民地地理学の展開と植民地研究」歴史地理学52-5, 2010, 24-42頁。
 - 10) 井上章一『日本に古代はあったのか』角川書店, 2008。
 - 11) T・モーリス=スズキ(飯笹佐代子訳)「国民国家の形成と空間意識」(上村忠男ほか編『歴史を問う3 歴史と空間』岩波書店, 2002) 111-130頁。
 - 12) 例えば『続日本紀』に「近代」の用例がある。またmodernの語源は後期ラテン語のmodernusだとされる。
 - 13) 樺山紘一『異境の発見』東京大学出版会, 1995, 139-229頁。
 - 14) 桂島宣弘『自他認識の思想史—日本ナショナリズムの生成と東アジア—』有志舎, 2008, 1-40頁。
 - 15) 三宅正樹『文明と時間』東海大学出版会, 2005, 8頁。
 - 16) 例えば、17世紀から18世紀にかけてフランスやイギリスで生じた「古代・近代論争」において、当時とギリシア・ローマ時代との文学上の優劣が論じられたことは、「古代」が専ら古典籍におけるものであったことをよく表している。前掲15) 183-226頁を参照。
 - 17) 例えば、18世紀に盛んに作成された「浪速古図」は、記紀に登場する「上古」の地名や海岸線の変化を推定・考証する性格をもっていた。上杉和央「近世における浪速古図の作製と受容」史林85-2, 2002, 33-73頁。
 - 18) 前掲6) ②。および、C・ナッシュ, B・グレアム(上杉和央訳)「モダンな歴史地理ができあがるまで」(B・グレアム, C・ナッシュ編『モダニティの歴史地理』古今書院, 2005) 1-3頁。
 - 19) M・オグボーン(上杉和央訳)「グローバリゼーションの歴史地理—1500年頃から1800年頃まで—」(B・グレアム, C・ナッシュ編『モダニティの歴史地理』古今書院, 2005) 51-83頁。
 - 20) M・オグボーンのモダニティ理解が示唆的である。Ogborn, M., *Spaces of Modernity: London's Geographies, 1680-1780*, Guilford Press, 1998, p12-22.
 - 21) 前掲6) ②。
 - 22) 前掲6) ③pp.455-456頁。
 - 23) 前掲6) ②35-42頁。
 - 24) 前掲4) 148-152頁。
 - 25) Gregory, D., “Between the book and the lamp: imaginative geographies of Egypt, 1849-50”, *Transactions of Institute of British Geographers* 20, 1995, pp.29-57.
 - 26) Teng, E. J., *Taiwan's Imagined Geography: Chinese Colonial Travel Writing and Pictures, 1683-1895*, Harvard University Asia Center, 2004, pp.60-80.
 - 27) 前掲5) 上巻130頁。ただし、空間的な他者の観念が希薄であり、ひとすじの時間軸として流れる時間の観念もまた希薄な文化も、存在する(した)と考えておく必要はある。
 - 28) 例えば、V・R・サヴェジ(拙訳)「空間をめぐる問題—東南アジアにおける非領域的共同体から植民地国家への移行—」歴史地理学50-1, 2008, 90-94頁, を参照。
 - 29) 千田 稔「日本における「キナカ(田舎)」の成立—「ヒナ」と「アヅマ」との関連において—」歴史地理学41-1, 1999, 32-43頁。
 - 30) 応地利明『絵地図の世界像』岩波書店, 1996。青山宏夫『前近代地図の空間と知』校倉書房, 2007, 39-127頁。
 - 31) 谷川健一編『日本庶民生活史料集成第四巻 探険・紀行・地誌(北辺篇)』三一書房, 1969, 412頁。以下、引用史料の字体は現在通用のものに代えた箇所がある。
 - 32) 前掲31) 409頁。
 - 33) T・モーリス=鈴木(大川正彦訳)『辺境から眺める—アイヌが経験する近代—』みす

- ず書房, 2000, 25-63頁。
- 34) 前掲31) 413頁。
- 35) 拙稿「〈山村〉概念の歴史性—その視点と表象をめぐって—」民衆史研究69, 2005, 12-15頁。
- 36) 竹内利美ほか編『日本庶民生活史料集成第三巻 探険・紀行・地誌 (東国篇)』三一書房, 1969, 385頁。
- 37) 「商船蝦夷地へ至りて勘定入事あればかの結びたる縄と刻ある木とを取出して去年の事をも審に弁ずるは結縄の意なるべし」とある。前掲31) 410頁。
- 38) 樫村賢二「『愚か村』とされた村—茨城県久慈郡水府村安寺・持方について—」歴史民俗資料学研究2, 1997, 85-109頁。
- 39) 前掲36) 428頁。
- 40) 樫村賢二「『秋山記行』と愚か村話」信濃51-1, 1999, 29-43頁。ほかに山村に「神代」を見いだした例として、『寺川郷談』の都会本(土佐群書類従など)に「神代の遺風猶奥山分に残りて有」とある。これはより原本(18世紀中頃)に近いとされる田舎本ではなく、流布の過程で加筆されるものとみられる。また深山幽谷に「太古の民」の風情が残るとする『世事見聞録』(1816年)の例も挙げておく。武陽隠士『世事見聞録』岩波書店, 1994, 399頁。
- 41) 前掲14)。
- 42) 前掲11) 62-63頁。
- 43) 姜 尚中「福沢諭吉—文明論とオリエンタリズム—」(歴史学研究会編『講座世界史7—「近代」を人はどう考えてきたか』東京大学出版会, 1996) 361-372頁。同『オリエンタリズムの彼方へ—近代文化批判—』岩波書店, 1996, 121-146頁。
- 44) 前掲43) ①370頁。
- 45) 荒川五郎『最近朝鮮事情』清水書店, 1906, 35-38頁。
- 46) Komeie, T. Colonial environmentalism and shifting cultivation in Korea: Japanese mapping, research and representation, *Geographical Review of Japan* 79-5, 2006, pp.664-679.
- 47) なお、近代日本の林学が確立した森林植生管理の思想については、拙稿「近代林学と焼畑—焼畑像の否定的構築をめぐって—」(原田信男・鞍田 崇編『焼畑の環境学—いま焼畑とは?』思文閣出版, 2011) 168-190頁。
- 48) 新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集 第五巻』教文館, 1970, 81頁。なお、この文章が先に英文で公表された際、「千年の古へ、神代の昔」は「three thousand years back, in the age of our *Kami*」, 「有史前紀」は「a prehistoric age」と表現されていた。同編『新渡戸稲造全集 第十二巻』教文館, 1969, 327頁
- 49) 中根隆行「『朝鮮』表象の文化誌—近代日本と他者をめぐる知の植民地化—」新曜社, 2004, 68-69頁。
- 50) 前掲49) 第2章注2 (328頁) 参照。
- 51) 小林橘川「朝鮮の印象」朝鮮114, 1924, 94-95頁。
- 52) 植民地時代の絵葉書の題材が、「『典雅』ではあるが古い朝鮮の風俗と文化, 「堂々たる」近代的な日本の建造物」から成り立っていたことも、対比的な図式を反映している。水野直樹「日本人は朝鮮の絵はがきに何を見たか」(高麗美術館編『写真絵はがき』の中の朝鮮民俗) 高麗美術館, 2010年) 6-7頁。
- 53) ①Komeie, T., Colonial tourism in Korean heritage spaces, 1910-1945, *Proceedings of the 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto 2009*, Kyoto University Press, 2010, pp.286-287. ②拙稿「扶余神宮と史蹟—植民地朝鮮における「内鮮一体」の景観」歴史の理論と教育135, 2011, 印刷中。
- 54) 小原新三「百済の旧都扶余より」(忠清南道協賛会編『百済の事蹟と扶余の名勝旧跡』忠清南道協賛会, 1915年, 1-10頁。
- 55) 濱田青陵『百済観音』平凡社, 1969, 93-94頁。初出は1921年。
- 56) 坂田政次郎「涙の史蹟半月城趾を訪ふ」朝鮮243, 1935, 125頁。
- 57) 前掲5) 上巻130頁。
- 58) 前掲5) 上巻202-203頁。
- 59) Godlewska, A., Map, text and image, the

mentality of enlightened conquerors, *Transaction of Institute of British Geographers* 20, 1998, pp.5-28.

60) 前掲5) 上巻205頁。

61) 前掲59)。

62) 前掲25)。

63) 本報告では言及することができなかったが、18世紀の国学の興隆以降、中国の他者化も日本の「近代」に大きく関わるものであった。その際、日本の文化的ルーツである中国を異質な他者として完全に否定する

のが困難であった点で、中国もまた他者化と「自己化」の間に位置していたように思われる。子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム—』藤原書店、2003、127-169頁。

64) 例えば、加藤政洋『大阪のスラムと盛り場—近代都市と場所の系譜学—』創元社、2002。水内俊雄・加藤政洋・大城直樹『モダン都市の系譜—地図から読み解く社会と空間』ナカニシヤ出版、2008。

A Spatial Implication of the Concept of the Modern Era: Views and Perspectives on Modern Historical Geographies

KOMEIE Taisaku

This paper reconsiders modern historical geographies through a fundamental question: How is the modern era defined in historical geography? This query is often overlooked in Japan because it has adopted a common periodisation of the modern era, that is, the period from the Meiji Restoration in the 1860s until the collapse of the Japanese Empire in 1945. Departing from this manner of periodisation, this paper reviews how the concept of the modern, especially in contradistinction to the ancient or pre-modern period, was constructed spatially in and around Japan, and investigates the relationships between temporality and spatiality. Normally, periodisation is deeply connected with spatiality in that it is generally defined not globally but only within a particular country or region. The sense of time with a single historical axis from the ancient to the modern era depends on the supposition of a particular enduring geographical unit. This locational temporality, which supposes different flows of time in different geographies, is an important precondition for *imaginative geographies*: the spatial relationships of a modern civilized *we* and the ancient primitive *others*.

The case of Japanese modern imaginative geographies shows us how the concept of the modern evolved with that of the ancient through a temporal and spatial connection. One of the earliest cases of the *ancient others* in and around Japan are found in the representations of the Ainu people as *jōkono-tami* (an ancient people) at the northern colonial frontier in the eighteenth century, as well as the inland mountain dwellers in the early nineteenth century. Paradoxically, they were not only regarded as the *others* who maintained a subsistence economy strange to the contemporary Japanese, but they were also represented as the ancient Japanese people themselves. These peripheral peoples were not the complete extraneous *others* but real substitutes for an *ancient ourselves*, who were understood to be at the origin of the temporal axis in the national history of Japan. Further, owing to the expansion of Japanese imperialism, colonial Korea came to be represented as ancient Japan itself in the early twentieth century. In becoming so, colonial Korea was subsumed into the space and time Japan had already experienced and was forced to follow the Japanese history of modernization. These cases of Japanese imaginative geographies suggest that, from the eighteenth century onward, a sense of the *modern ourselves* developed through a relationship between spatiality and temporality.

Key words: periodisation, imaginative geography, ancient era, colonialism